

# 全国の火山活動状況（1987年1月～6月）\*

気象庁地震火山部  
地震火山業務課火山室

気象庁が常時観測を実施している17火山とその他の火山について、1987年1月から6月までの活動状況を、この期間に得られた情報をもとに要約した。

全国火山活動状況を第1表に、火山情報発表状況を第2表に示す。

第1表 全国火山活動概況（1987年1～6月）

Table 1 Volcanic Activity in Japan (From Jan. to June 1987)

Month Volcano	1	2	3	4	5	6
Sakurajima	▲	▲	▲	▲	▲	▲
Izu-Oshima	●	●	●	●	●	●
Tokachidake	●	●	●	●	●	●
Bandaisan						●
Niigata - Yakeyama					●	●
Suwanosejima	▲			▲		▲
Fukutoku - Oka-no-Ba	●	●	●	●	●	●

▲ Eruption      ● Anomaly

第2表 火山情報発表状況（1987年1～6月）

火山名 情報	桜 島	阿 蘇 山	浅 間 山	伊 豆 大 島	雌 阿 寒 岳	十 勝 岳	樽 前 山	有 珠 山	北 海 道 駒 ヶ 岳	吾 妻 山	安 達 太 良 山	磐 梯 山	那 須 岳	草 津 白 根 山	三 宅 島	雲 仙 岳	霧 島 山
定 期	6	6	6	6	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
臨 時	1			23		2											
火山活動																	

桜島（鹿児島地方気象台）

月別の活動の推移は第3表のとおりである。

第3表 桜島火山観測資料

月	1	2	3	4	5	6
噴火回数	17(13)	2(0)	2(1)	20(0)	11(1)	8(3)
地震回数	1924	359	490	185	1149	368
微動継続時間合計(h)	6.4	0	(3m)	(2m)	2.9	33.6

( )内：爆発回数，地震回数：B点（地震＋微動）

南岳山頂火口は1月中に13回爆発したが、大半は瞬発力が弱く、噴煙を静かに噴き上げた程度だった。比較的規模の大きかった3日06時21分の爆発は、高さ200メートルの火柱を伴い、多量の噴石を5合目まで飛散させたが、被害はなかった。2月以降は爆発が少なくなり、噴煙放出を主体とした活動様式となった。

火口の状況（2月9日、海上自衛隊撮影の火口写真より）

火口底（A火口）には溶岩が地下から押し上げられて、直径40～50メートルの円形上に露出しているのが認められる。周辺部はいくらか外側にせり出し、固まっているようにも見えるが、殆どは灼熱したもののである。活動の盛んな1986年12月中旬には、溶岩池の直径は150メートルもあったが、それに比べると量は少なくなっている。

なお、参考のため以前に撮影された3枚の写真を掲載する。



昭和62年(1987年)2月9日(海上自衛隊撮影)

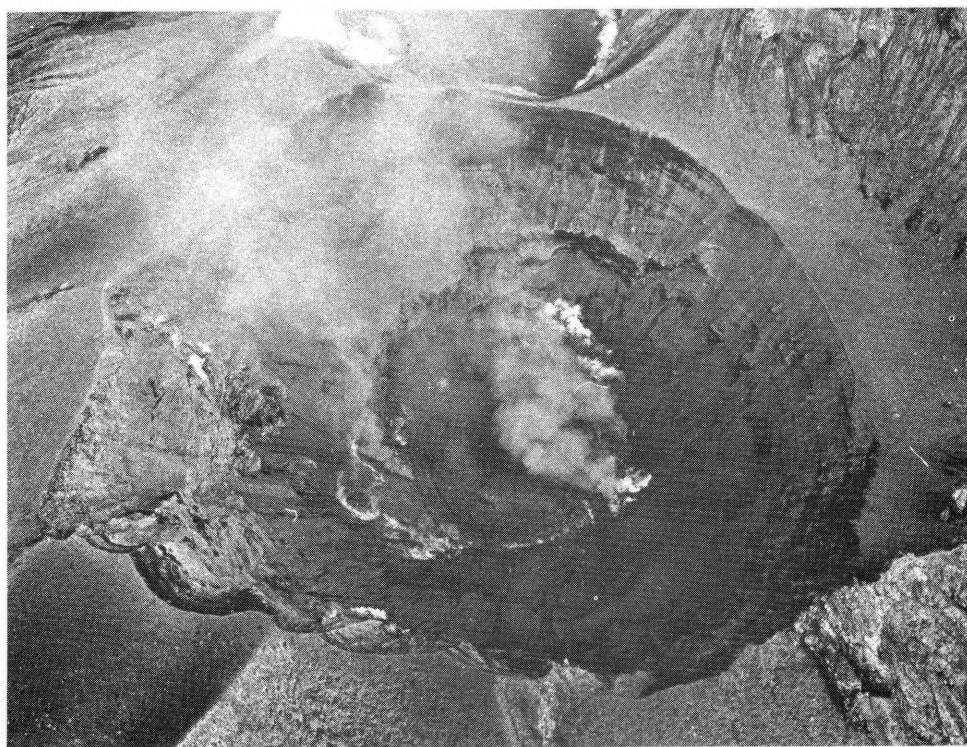


昭和54年(1979年)5月28日(京都大学提供)





昭和51年(1976年)5月17日 (海上自衛隊撮影)



昭和45年(1970年)5月13日 (海上自衛隊撮影)

伊豆大島（大島測候所）

1986年12月から1987年6月までのC点における地震回数は次のとおり。

1986年	1987年					
12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月
463	196	33	32	9	>1795	132

1986年11月の噴火以降、地震回数は次第に減少したが、5月6日から下旬にかけて伊豆半島東方沖に地震が群発（最大M：5.1）し、また、5月22日から26日にかけて島の南東部で地震が多発したため、増加した。なお、23日06時25分の島南東部の地震は、島内に発生したのものとしては、1986年12月27日以来の有感地震（震度1）であった。

1986年12月19日に停止した微動は、1987年1月1日から再び断続的に記録されるようになり、1月26日から2月4日にかけては一時連続微動となった。また、5月中旬ころより、一回の継続時間が二時間を超えるような長い微動が現われるようになった。

なお、噴火以降新しく整備された機器による観測結果等については、別途記述する予定である。

表1-1 伊豆大島の火山活動経過（昭和62年3月まで）

昭和61年	
4月1～2日	北部で群発地震。測候所有感38回。
7月	火山性微動始まる（間欠的微動）。
8月、9月	ときどき群発地震。微動しだいに大きくなる。
10月24日	間欠的火山性微動終る。
10月27日	連続的火山性微動始まる。
11月12日	三原山火孔壁で新しい噴気始まる。
11月15日	17時25分頃山頂で噴火始まる。
16日	有感地震始まる。山頂噴火続く。
17日	地震、噴火続く。
18日	地震、噴火続く。
11月19日	地震、噴火続く。朝溶岩流が三原山頂から溢れだす。 23時過ぎから噴火活動低調となる。
11月20日	噴火活動低調（爆発散発的）。
11月21日	14時過ぎから地震始まる。16時15分カルデラで割れ目噴火始まる。溶岩流出。住民等避難。
11月22日	朝M6.0の地震。山頂付近から火山灰噴出つづく。
11月23日	朝最後の爆発。昼頃小さい溶岩流（最後の噴火）。
11月24日	南方沖で群発地震。
12月17日	火山性微動始まる（間欠的）。
12月18日	17時半頃山頂で噴火始まり、19時半頃ほぼ収まる。
昭和62年	
1月1日	火山性微動再び始まる（間欠的）。
1～3月	火山性微動の間欠的な発生続く。

浅間山（軽井沢測候所）

月別の活動の推移は第4表のとおりである。

第4表 浅間山観測資料

観測点		月					
		1	2	3	4	5	6
A	火山性地震	23	30	19	41	30	45
	火山性微動	0	1	0	0	3	0
B	火山性地震	256	330	597	594	497	736
	火山性微動	3	3	6	16	60	26
C	火山性地震	142	190	323	325	249	365
	火山性微動	3	1	2	3	15	11
D	火山性地震	17	35	32	30	41	60
	火山性微動	0	0	0	0	2	1
E	火山性地震	90	162	180	192	176	186
	火山性微動	2	1	1	0	10	0

地震回数はB点で3月ころより増加し、6月にはC点とともに昭和61年8月以来最も多く観測された。また、火山性微動は5月にB点で60回観測されるなど、1～3月に比べて増加した。

遠望観測により観測された噴煙の色はすべて白色、噴煙量は3（中量）、またはそれ以下で、噴煙高度の最高は4月17日の1000メートルだった。

5月7日の火口観測の結果は、前回（昭和61年9月25日）に比べ、噴気孔の数、噴気の状態ともかなり増していたが、噴気音は弱く聞こえる程度だった。赤外放射温度計による噴気箇所の最高温度は121.8℃（前回は63.9℃）であった。

阿蘇山（阿蘇山測候所）

月別の火山性地震等の推移は第5表のとおりである。

第5表 阿蘇火山観測資料

月	1	2	3	4	5	6
地震回数	66	18	34	112	20	22
孤立型微動回数 0.5 $\mu$ 以上	76	94	155	78	26	6
連続微動平均振幅 ( $\mu$ )	0.1	0.1	0.2	0.2	0.1	0.1

中岳第1火口の火口底に昭和60年7月1日から観測されていた湯だまりは、本年に入ってからもわずかながら認められていたが、4月4日に一たん消滅した。その後小規模なものが時折見られたが、5、6月には雨が多かったため、中規模な湯だまりの確認される日があった。

噴気孔は多数観測され、とくに北西側の直径2～3メートルの噴気孔は活発で、勢よく青白色ガスを含む白煙を噴出する日が続いた。5月に入ると他の噴気孔も活発となり、8日から時々弱い鳴動が観測されていたが、6月19日以降は観測されなくなった。

土砂噴出は毎月1～3メートルであったが、5月27日には7～8メートルのものが観測された。

赤外線放射温度計による湯だまりの表面温度の観測結果は次のとおり（月の最高値で）

月	1	2	3	4	5	6
温度	—	—	—	—	—	69

—は湯だまりなし

雌阿寒岳（釧路地方气象台 6月1日火山情報）

火山性地震の月別回数は次のとおり。

月	1	2	3	4	5	6
回数	7	38	75	26	47	35

この期間、遠望観測結果に変化は認められなかった。

現地観測を5月28日～29日に実施した。結果は次のとおり。

(1) ポンマチネシリ（本峰）

第4火口の噴気活動はかなり活発であった。噴煙は強く噴出し、白色だが時にはうすい青色が混じることもあった。また、有毒な多量の火山ガスを含んでいた。

(2) 中マチネシリ第3火口

第3火口底の個々の噴気孔には若干の変化はあったが、火口全体に大きな変化はなかった。

### 十勝岳（旭川地方気象台 6月24日火山情報）

火山性地震の月別回数は次のとおり。

月	1	2	3	4	5	6
回数	11	13	25	9	11	42

この期間、火山観測所からの遠望観測では、噴煙量に大きな変化はなかった。

現地観測を6月22日～23日に実施した。結果は次のとおり。

- (1) 62-I, 62-II火口ともに活発な噴気活動を続けている。62-I火口の地中温度は400℃以上の高い状態が続いている。
- (2) 旧火口（安政火口）では、大小多数の噴気孔があり、やや活発な活動を続けている。
- (3) その他、大正火口・振子沢・湯の沢では、弱い噴気活動を続けている。

### 樽前山（苫小牧測候所 5月28日火山情報）

火山性地震の月別回数は次のとおり。

月	1	2	3	4	5	6
回数	3	0	0	4	1	14

この期間、苫小牧市内からの遠望観測による噴煙の状況はとくに変化はなかった。

現地観測を5月26日～27日に実施した。結果は次のとおり。

A火口およびその他の噴気孔群の噴気活動、噴気温度、地中温度、火山ガスの測定値等にとくに大きな変化はなかった。

### 有珠山（室蘭地方気象台 5月22日火山情報）

火山性地震の月別回数は次のとおり。

月	1	2	3	4	5	6
回数	4	7	8	7	9	6

この期間、室蘭地方気象台からの遠望観測では、有珠山、昭和新山とも噴煙の状況に大きな変化はなかった。

現地観測を5月19日～20日に実施した。結果は次のとおり。

#### (1) 有珠山

銀沼火口、I火口および小有珠南東斜面などでは活発な噴気活動が続く、噴気には有毒なガスが含まれていた。I火口とその周辺では噴気温度が500度を越えるような場所があった。その他の地域にはとくに変化は認められなかった。

#### (2) 昭和新山、四十三山

とくに変化は認められなかった。



北海道駒ヶ岳（森測候所 5月22日火山情報）

火山性地震の月別回数は次のとおり。

月	1	2	3	4	5	6
回数	2	0	3	0	2	3

この期間、森測候所からの遠望観測では、噴煙、その他とくに変わった現象はなかった。

現地観測を5月19日～20日に実施した。結果は次のとおり。

- (1) 大正火口付近の噴気地帯では、最高温度が98℃と全般的に高温の状態となっている。
- (2) 昭和火口は噴気活動が弱まり、地中温度も低下した。
- (3) 山麓温泉の状況は、とくに変化がなかった。

吾妻山（福島地方気象台 6月13日火山情報）

火山性地震の月別回数は次のとおり。

月	1	2	3	4	5	6
回数	6	11	22	12	19	30

この期間、福島地方気象台からの遠望観測では、噴煙の出ている日は少なく、噴煙量も少量だった。

現地観測を6月8日と11日に実施したが、各観測点とも異常は認められなかった。

安達太良山（福島地方気象台 6月10日火山情報）

火山性地震の月別回数は次のとおり。

月	1	2	3	4	5	6
回数	2	1	6	2	1	27

現地観測を6月1日～2日と5日に実施した。結果は次のとおり。

全般に、噴気活動や地熱、温泉等に大きな変化は認められなかったが、沼ノ平西側の登山道付近では、地熱の高い状態や有毒なガスの発生が続いている。

磐梯山（若松測候所 6月10日火山情報）

火山性地震の月別回数は次のとおり。

月	1	2	3	4	5	6
回数	20	14	11	21	19	418

6月16日16時49分、猪苗代湖北西部を震源とするマグニチュード4.5の地震が発生した。6月23日までに震度3を含む有感地震を14回観測した。

現地観測を6月2日～3日に実施したが、各観測点とも異常は認められなかった。

那須岳（宇都宮地方気象台 6月4日火山情報）

火山性地震の月別回数は次のとおり。

月	1	2	3	4	5	6
回数	28	11	15	43	43	71

この期間、火山観測所からの遠望観測では、噴煙量は少量で、特別な変化は認められなかった。  
現地観測を5月28日～29日に実施したが、各観測点とも、特に異常は認められなかった。

草津白根山（前橋地方気象台 6月12日火山情報）

火山性地震の月別回数は次のとおり。

月	1	2	3	4	5	6
回数	12	8	17	9	28	34

1月から5月まで火山遠望隔測装置による遠望観測では、表面現象に異常は認められなかった。  
現地観測を6月3日～4日に実施したが、表面現象、噴気ガス濃度等に大きな異常は認められなかった。

三宅島（三宅島測候所 2月20日火山情報）

火山性地震の月別回数は次のとおり。

月	1	2	3	4	5	6
回数	3	4	14	9	10	5

現地観測を2月17日と19日に実施したが、雄山の噴気地帯の噴気温度、地中温度は前回（昭和61年10月）と比較してほとんど変化はなかった。

雲仙岳（雲仙岳測候所 4月10日火山情報）

火山性地震の月別回数は次のとおり。

月	1	2	3	4	5	6
回数	67	37	43	62	55	65

現地観測を4月8日に、雲仙地獄、小浜温泉で実施したが、特に変化は認められなかった。

霧島山（鹿児島地方気象台 5月7日火山情報）

火山性地震の月別回数は次のとおり。

月	1	2	3	4	5	6
回数	4	10	17	13	15	30

現地観測を4月16日に山麓周辺、23日～24日に高千穂御鉢火口と新燃岳火口で実施した。

(1) 新燃岳

火口内第6火孔（火口湖西側）の噴気は110℃で昨年12月より12℃昇温していたが、噴気量は減少していた。

(2) 御鉢火口内では前回（昭和61年12月）と同様、硫化水素の臭気を強く感じたが、噴気量は逆に減少気味であった。

